池上先生の「声」を聞く
――池上俊一先生を送る――

村 松 真 理 子

池上俊一先生は物静かな方である。それに異論のある人はあまりいないのではないか。

先生は静かに言葉を発せられる。「声」を通して、または「文字」を介して。駒場で共に時間を過ごした人間の中で、肉声に関して私は比較的たくさん聞いた方ではないか。シンポジウム、テーマ講義、翻訳書・教科書の編纂、前期・後期・大学院の授業計画の相談、等々、様々な場で日常的にお話し続けたのは、私にとって駒場という場所で働く幸運の一つだった。先生が声を荒げるのは聞いたことがないし、大事な会議でこれは言うべきだと思われるような時、準備してこられた文言から慎重に言葉を選びつつ、緊張気味の顔つきで発言されていた様子が思い浮かぶ。大きな教室を埋める学生を前にノート片手に淡々とお話しされていた姿は、私の中では中世の修道院のイメージに重なってくる（ここ数年はパワーポイントも使われる）。ただし、食事をご一緒する時は修道院の峻厳な沈黙というより、ゆったり微笑みを浮かべてお話しになる。何か仕事が一段落して和やかに会食したときの先生のご様子が思い浮かぶ。おすすめレストランで、先生のご自宅で、拙宅で……そういう機会には、いつも穏やかで楽しい時間が流れ、おしゃべりな類の私が陪席しても、なんだか静かな会食だったように思い出される。

先生の文字を通しての発信については、私がここで記すまでもない。池上先生ほど雄弁で多作な研究者は日本の歴史研究者の中でもかなり少ないだろう。大部な研究書から、歴史愛好家・読者対象、歴史少年少女向けと、読者層も広く、様々な叢書や出版社から著作を刊行されている。翻訳も複数の言語から多数。

テーマは怪物、動物、王様、騎士、聖母、魔女、天使、聖人、天才、建築、農民食、パスタ、都市、等々枚挙に暇なく、ヨーロッパ中世ルネサンスの豊穣な歴史と心象をめぐって先生に語られ文字となった言葉は、大きな川のような流れを作るが、それは周りの木々をなぎ倒すうねりというより、たくさんのせせらぎや様々な支流が流れ込み、悠々と海に向かって流れている大河の趣だ。レトリックや下手な比喩を書き連ねる駄文は先生をお送りするのに相応しくないが、池上先生のお仕事が、私に長くはるかな大河の流れを連想させるのは、先生が様々な先行研究を統合されてご自分の数々の著書にまとめてこられたというイメージからだろう。先生ご自身、世界の歴史研究の潮流を批判的に発展させた日本の西洋中世史研究に連なり、後進を育ててこられた。樺山紘一先生と学

ばれた東京大学文学部の西洋史学科を 1979 年に卒業、大学院人文科学研究科で引き続き西洋中世史を専攻され、1986 年から 1988 年までパリに留学してフランス国立社会科学高等研究院でフランス社会史アナール派のジャック・ルゴフ教授はじめフランス中世史研究の最前線の研究者と学ばれた。駒場に 1994 年に着任されてからは、地域文化研究専攻で研究教育に従事され、その間、主にヨーロッパの中世・ルネサンス研究の分野でラテン語、ドイツ語、フランス語、イタリア語の史料研究を学ぶたくさんの学生の指導にあたられながら、実に多くの書籍を世に送り出されたことは、私たち同僚誰もがよく知るところだ。

私が池上先生に初めてお目にかかったのは、もう 20 年近く前で、私が駒場に赴任することになっていた秋の始まりだった。10 年以上住んだ海外からの子連れ引越しで、動かすべき「本」の選択と重みに悩んでほとほと疲れていた私は、駒場で初めてお目にかかった日、碩学を前に、――当時すでに多くの著書を世に問い、その何冊かのゆえにお会いする前から私の方ではもう存じ上げている気になっていた歴史学者に面と向かって――、「もう本当に本と一緒に移動するのが嫌になりました、もっと身軽になりたいです」と、それなりの実感から口走ったのである。一瞬驚いたようにこちらを見据えてから、困ったような笑いを浮かべつつ池上先生がおっしゃったのを今でも記憶している。「でも、やはりそれは我々の一番の商売道具ではないでしょうか」まさにその通り。歴史研究も文学研究も、テクストが、文書が命……私は赤面するしかなかった。そもそも、まだ、ネットで多くを間に合わせる時代でもなかったのである。

そのような出会いから始まったにもかかわらず、冒頭に書いたように、今日まで池上先生は駒場での私の仕事を導いてくださり、様々な場でご一緒させていただくことになった。私が駒場の歴史家やフランス文化専門家の先生方を差し置いてこの「送る言葉」を書かせていただくのは、多分、ヨーロッパ中世、特にイタリアゆえの繋がりからだ。企画のお手伝いをした中世関連の国際シンポジウムで私自身の研究の関心や外国人研究者との関係も文学を超えて広がったこと、先生の肉声で聞くご講演や発表から大きな刺激を常に受けてきたこと、先生の監修で日本語では未公刊だった人文主義・ルネサンス基本文献のアンソロジーの翻訳事業に参加したこと等々は貴重な経験だった。そして、イタリア語を新たな第六番目の初修外国語とすべく、まず中級読解教材として東大出版会のシリーズの一冊として教科書「Piazza（広場）」を編集し、後期課程のイタリア地中海コースが生まれて「悦ばしきイタリア地中海」テーマ講義を隔年で開催……この 18 年間、池上先生とご一緒した様々なシーンが思い浮かぶ。

そこで、今、改めて先生の代表的な研究書である大著（474 + 120 ページ！）『公共善の彼方に――後期中世シエナの社会』（2014）を広げてみる。序章では、シエナの市庁舎に掲げられ、今も訪れる人に美しさと同時に権威を感じさせる 14 世紀のフレスコ画アンブ

ロージョ・ロレンツェッティ「善政と悪政の寓意と効果」の図像解釈を通して、そこに描かれている「公共善」の概念が呈示される。そしてそれを軸にしながら、後期中世のシエナの都市の社会性が、行政、社会的結合関係、(『デカメロン』を彷彿させる）裁判記録に残された「噂」「悪態」、構成員のアイデンティティーを表象した都市空間の「トポス」や「イメージ」を通して、詳らかに分析されていく。

ここ数週間、先生の多くのご著書のタイトルを思い出し、その何冊かを自分の部屋に並べてこの原稿のことを考え続けてきたわけだ。するとふとある日、デジャ・ヴュ感といっしょに、村上春樹の顔が浮かんできた。どうしてだろうと考えてみる（池上先生の文学の好みとは異なるかもしれないがここでは許していただこう）。村上春樹はまず短編・中編小説でテーマを表現し、それらの作品がまるで習作だったかのように、数年に一冊、大きな長編を仕上げる。村上に限らず、多作で長い間創作を続けることができた多くの文学者が歩んだパターンだ。池上先生もまた、学会にむけて発信される学術論文に限らず、比較的短い、時に「啓蒙的」だったり、若い読者向けだったりする新書や一般書をお書きになり、その間、数年のサイクルで大きな学術書をまとめてこられたように思える。まさに学者の王道。村上は、単独の名前で、あるいは専門家と組んで、翻訳作業をずっとライフワークにしつつ、自分の作品世界に訳出した作家の文学を取り込んでいくが、池上先生もご自分が先行研究として取り入れてこられた研究書や、基礎的な史料であるテクストの翻訳書を単独で、チームで、何冊も出してこられた。村上春樹の文学がアメリカ文学の世界を日本語で消化して世界文学に再発信しているように、池上先生の中世研究は日本のアジアの研究者としての視点を通して改めてヨーロッパと世界の歴史観と近代批判を目指していらっしゃるように思えるのだ。

前傾の本の「あとがき」で、中部イタリア、トスカーナの中世都市シエナとの出会い以来、その地の文書館と「町」に通い詰め、歩き尽くした経験について語ってから、こうある。

> だがそうした古文書を通じての、また町歩きを介しての、過去への没入だけでは、まだ「往路」のみであって、「復路」を確保しないと歴史を描くことはできない。だからそのために、今度は逆にとことん醒めた目で、客観的に後期中世のシエナという都市の意義を考えてみる、という課題を自らにかした。しかも二十一世紀の極東に生きる一歴史学徒が、時間的にも空間的にも非常に離れた対象を相手にするのだから、たんに、イタリア史やヨーロッパ都市史上での意義を闡明するだけではつまらない。世界史的な意味と価値をなんとかして見出してみたかった。

やはり、20 歳の夏、その年頃にありがちな人生への期待と挫折感に苛まれ、「荒んだ精神状態」で 1980 年代のシエナに辿り着いた私は、生きること自体の美しさに目覚めた

ような思いで、歴史の上に築き上げられた不思議なイタリアについて学びたいと切望した。これもまた先生の言う、あまたある外国人のシエナ「一目惚れ物語」のひとつだろう。思えば、私のような微力な文学研究を目指す者が、同じ職場で、高くそびえる中世研究者である池上先生と様々な場をご一緒できたのは、何よりも、イタリアの言葉と文化を対象とする研究を、特にシエナに象徴されるその中世以来の豊穣な遺産に関して、日本の人文学の中でより強固なものにしたいという共通の思いからだったのではないだろうか。そこで共有されている「イタリア」は、近代国家的な国境に制限されるものではなく、より長い時空間としてのヨーロッパに開かれ、その重要な礎を作っている。欧米列強から近代的な科学・技術と制度を学ぶ必要に迫られて作られた日本の明治以降の教育や学問の構造を、西洋近代に向けてきた自らの眼差し自体を批判的に見直すことで再編成するための大きな試みに中世研究を位置付けることと、駒場の学生たちへの教育の一環に、イタリア語教育を初修外国語として定着させることとはパラレルだったと思う。その教育・研究の双方に関わる事業を、池上先生と、フランスルネサンス文学研究の宮下志朗先生とが中心になって進めようとされていたとき、私は駒場でお手伝いする機会に恵まれたのだ。2007 年にイタリア語は前期課程の初修外国語の一つとなったが、法人化後に全てのリソースが減っていく中、人文・社会・理学系の多様な専門分野の先生方にその意義を理解共有していただくプロセスは「いばらの道」だった。ただし、そこで費やされた時間とエネルギーは、「イタリア語初修化のための有志」に共に名を連ね、洗練されていながら大胆な二人の優れた研究者の仕事ぶりを間近で見ながら、その教育への情熱を同僚として共有させていただくことで報われるものだった。後期課程では「イタリア地中海」という看板を掲げるコースを開くことができたが、それも、池上先生の理念と情熱に拠るところが大きかった。

では、これからの中世研究と歴史研究に関しては、どのようなメッセージをお持ちなのだろうか。池上・中世心性研究の集大成である近著『ヨーロッパ中世の想像界』(2020) は、自然界の様々な存在や宇宙の構成、神聖なイメージと悪魔的なイメージ、さらには現世と異界、あるいは社会の内と外が、どのように中世の人々の想像の中で生成され、継承されてきたかを分類しつつまとめた大全のような書物だ (実に 790 + 158 ページ !)。植物、庭園、鳥、動物。大地、水、火、風。天使、心臓、魔術師、魔女。権力、友愛、ユダヤ人、楽園、煉獄。そして、その巻末で著者の高らかな声が響く。

> 歴史の中の想像界は、絶え間なく「変化」している。それは内的な運動と、外的な状況によってである……
>
> このところ社会史や心性史は元気がない。歴史学はまるで先祖返りしたかのように、制度史や政治・経済史が主流である。社会史や心性史のような曖昧模糊、とりとめのないものじゃなく、もっと地に足つけた確固たる歴史学に戻ろうよ、などと

いう発言も耳にする。とんでもない。1960〜80年代に一世を風靡した社会史や心性史にこそ、歴史学の神髄があるのであり、それは役割を終えたのではなく、本格的に開花する前に、日本のみならず世界的な情勢の変化――グローバル化に象徴される――によって萎んでしまったのである。ふたたび水を掛け肥料を施し、大きく育てていかなければならない。反動的な学界動向を許してはならない。（点は引用者）

池上先生の学問の蓄積に連なりながら、私なりの小さな流れを少しでも引っ張って、どこかの土地の小さな片隅だけでも潤すことができるように、改めて、今日から、時間とエネルギーを傾注し精進したい。そして、先生の作ってこられた流れに、後進の中世ルネサンスの歴史研究者たちや、イタリア文化に触れた学生たちの作る支流がさらに豊かに流れこみ、ますます肥沃な土地が生まれますように。池上先生、どうぞ、駒場を離れられても、健筆・健啖を保たれ、ますますのご活躍をお続けください。疫病が襲った中世ヨーロッパは、そこから再生し、多くの新たな文化の形と社会変化を生み出しました。21世紀初頭の世界に広がったCovid19のために、残念ながら先生の最終講義はしばらくお預けですが、感染の終息後、先生のお声を聞かせていただくのを、今から楽しみにいたします。

今後もどうか紙の上と食卓の両方で先生をお囲みするConvivioが、ますます実り豊かに続きますように！